

老人ホームで働くインドネシア人介護福祉士

「あなたの大切なおじいさんやおばあさんを突然外国人が介護することになったら、どう思いますか？」

そう問いかけるのは、インドネシア出身のティアス・パルピさん。横浜市青葉区の特別養護老人ホーム「緑の郷」で介護福祉士として働く。彼女は日本とインドネシアの間で平成20年に署名された経済連携協定EPAに基づき、平成21年度に介護福祉士候補生として来日した。

昨年までに788人がフィリピンとインドネシアから来日しており、介護福祉候補生として施設で研修を行っている。3年間の研修(現在は4年間に延長)ののちに日本で介護福祉士になるための国家試験に合格し、その後も研修を行った施設で就労することが期待されている。今年の3月には95人の候補生が受験し、36人が合格した。ティアスさんもそのうちの一人だ。日本人受験者を含む全体の合格率は63.9%だった。

ティアスさんをはじめとする候補生が介護福祉士の資格を取得することは容易ではない。試験では介護についての知識はもちろん、日本の社会保障制度についても問われる。インドネシアには日本のような充実した社会保障制度がほとんど存在しないため、概念として理解すること自体が難しいという。そもそも試験は日本語で行われ、今のところ読み仮名もついていないため、高度な日本語能力も前提となる。

また、試験だけでなく、施設での研修や就労も簡単ではない。受け入れが始まった当初は前例がないために、受入側の施設も候補生も、互いにどうすればいいのか把握できていなかった。緑の郷がティアスさんを受け入れるときも、住居や生活必需品など、なにをどう準備していいのかわからず手探りだったと施設長の古川さんは振り返る。他の施設で研修を行っていた候補生の中には、施設との折り合いがつかずに研修期間の途中で帰国してしまった例もあるという。

それにもかかわらず、ティアスさんを取り巻く周囲の様子は驚くほど明るい。ティアスさんが「緑の郷」に来て3年半が経つが、いまだに利用者からの苦情は一件もない。それどころか、ティアスさんが京都での研修に出席するために施設を離れ、4日ぶりに出勤すると、入居者から「体調が悪かったの？見かけないから心配したわ」と気遣われた。受け入れられていることが実感できたとティアスさんははにかむ。

また同僚からの支持も厚い。来日して1年が過ぎたころ、ティアスさんは一時帰国のために2週間の休みを申請した。日本人職員では滅多に許可のおりない長期間の休みである。もちろん休ませてあげたいが、ほかの職員との兼ね合いもあり、古川さんは悩んでいた。しかし古川さんを説得したのは、ティアスさんの現場の上司だった。日ごろ本当に一生懸

命やってくれている、責任は自分たちで取るからと説かれ、長期休暇の取得を認めたという。古川さん自身、ティアスさんのことを娘のように思っていると微笑みながら語る。

緑の郷の職員のあいだでは信頼関係が築かれていて、お互いに率直な気持ちを伝え合うことができるという。ティアスさんも、自分がしたいことや相手にしてほしいことを、率直に伝えることができる。ここでは彼女を受け入れた当初から、この方針を貫いているという。他の施設の中には、受け入れた候補生には主に勉強をさせ、業務にはほとんど就かせないところもあった。しかし緑の郷では、候補生を職員として扱うことを優先したティアスさんもその期待にこたえ、半年が経つ頃には戦力と見なされるまでに成長した。そのため、本格的な試験勉強を始めたのは、3年目に入ってからだったそうだ。

しかしティアスさんも、来日直後はある大きな疑問を抱えていた。

「自分の子どもでも家族でもなく、知り合いでもない人間に介護されて、その人は本当に幸せだろうか？」

インドネシアでは家族はもちろんのこと、地域ぐるみで1人の高齢者を介護する。そのため、高齢者の介護をすること自体には抵抗はなかった。しかし家族でもない職員に介護される入居者はどう思っているのだろうか。不幸なのではないだろうか。

実際に働き始めると、その不安は少しずつ変わっていった。入居者の中には、家族の負担にはなりたくないという理由でやって来た高齢者がいる。自分の家族には言えないのに、職員にはわがままも言える。一方で、職員だからこそ家族以上に優しくできることもある。その人の家族になったつもりで、優しく介護できればいい。今ではそう思えるようになった。

ティアスさんに今後のことを尋ねると、次のように意気込みを語ってくれた。

「資格を取ったが、まだまだ学ぶことがある。介護やケアプランについて、もっとたくさん日本で勉強し、何年後になるかわからないが、ゆくゆくはインドネシアでその経験を生かしたい」

同僚に頼りにされ、介護する入居者にも愛されるティアスさん。国籍は関係なく、一人の職員として信頼されている。ティアスさんは、外国人である自分がこれほどまでに受け入れられていることについて、不思議で仕方がないという。

「緑の郷で暮らす私たちは、一つ屋根の下の家族」

そんなティアスさんの言葉は、彼女が周囲に温かく受け入れられていることを物語っている。